

◆『戦史秘話』第十二話◆

第一次世界大戦においてフランス軍として戦った日本人飛行家

－磯部鉄吉海軍少佐－

フランス陸軍航空隊に加わった日本人

第一次世界大戦において、フランス陸軍航空隊に飛行家（パイロット）として従軍した日本人の存在は、ほとんど知られていない。実は、滋野清武男爵、磯部鉄吉海軍機関少佐、石橋勝浪、小林祝之助、茂呂五六、武市正俊、山中忠雄、馬詰駿太郎の、少なくとも8名もの日本人が参戦していた（荒山彰久「日仏航空関係において日本が受けた影響」クリスチャン・ポラック/鈴木真二編『日仏航空関係史ーフォール大佐の航空教育団来日百年』東京大学出版会、2019年、111－112頁）。石橋以下の6名は、フランスやアメリカの飛行学校で操縦術を学んだ民間のパイロットである。

8名のうち、滋野男爵、石橋、磯部の3名は功績を認められ、フランス政府からレジオン・ド・ヌール勲章などを授与されたが、一方、小林、武市、山中の3名は戦死し、故国日本の地を再び踏むことはなかった。

右の史料は、「本邦航空 犠牲者表 大正1年～大正12年4月 1、遭難摘要表」である。戦死した3名の名前が、死亡年月日・場所、搭乗機、事故原因とともに記されている。例えば、小林は、「大正7年6月17日 民間飛行家 小林祝之助 仏国ダンキルク スパット（戦闘機） 敵弾命中」と記されている。

大正七年				大正六年			
二一〇	二二二	二一九	二一七	二一四	二一〇	二〇八	二〇六
陸軍大尉	海軍大尉	民間飛行家	民間飛行家	民間飛行家	民間飛行家	民間飛行家	民間飛行家
磯部鉄吉	石橋勝浪	小林祝之助	坂元守吉	山中忠雄	武市正俊	馬詰駿太郎	茂呂五六
機銃	機銃	機銃	機銃	機銃	機銃	機銃	機銃
敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中
大正七年六月十七日	大正七年六月十七日	大正七年六月十七日	大正七年六月十七日	大正七年六月十七日	大正七年六月十七日	大正七年六月十七日	大正七年六月十七日
ダンキルク	ダンキルク	ダンキルク	ダンキルク	ダンキルク	ダンキルク	ダンキルク	ダンキルク
スパット	スパット	スパット	スパット	スパット	スパット	スパット	スパット
敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中	敵弾命中

* 「海軍一般史料 ②戦史 支那事変」(② 戦史ー支那事変ー85、アジ歴レファレンスコード：C14120542400)

磯部鉄吉－海軍機関少佐から民間の飛行家へ－

本稿では、8名のうち唯一の軍人である、磯部鉄吉（おのきち。「鉄」吉ではない）海軍機関少佐について述べる。磯部は、1877（明治10）年8月14日、石川県金沢市に生まれた。1899年4月、海軍機関学校を卒業（6期）し、日露戦争では日本海海戦に駆逐艦「電」の機関長として参戦し、功5級金鵄勲章を賜っている。その際、「四面水と空ばかりの渺茫たる戦場で、『もし飛行機があったなら・・・』と考えたのが発端」で、海国日本における水上機の必要性を認識したと言われる（日本航空協会編『日本航空史 明治・大正篇』50頁）。時あたかも、ライト兄弟の世界初飛行の成功から5年後のことである。

その後も航空機の発達に関心を抱いた磯部は、願い出て1908年12月、開発に没頭するため、閑職の通報艦「姉川」機関長（呉）に着任し、艦長の承認を得て、滑走機、次いで「姉川」の甲板において艦上から海上に飛ばす複葉機の研究・製作に着手した。

横須賀の巡洋艦「音羽」、次いで海防艦「壱岐」の機関長へ転任後も、フランスのファルマン式複葉機を模した試作機の製作を続けた結果、1910年11月には「磯部式水上飛行機」の特許が承認された。このような磯部の熱心さは、当時「水上機の鬼」とまで評された（岩本喜一「白浜海岸・磯部氏の相重ぐ実験不運」『水交』第93号、1961年3月、19頁）。

その後、横須賀白浜海岸で水上滑走試験を試みたが、実用化には失敗した。こうした実験の経費は磯部自身の私費で賄われていたものの、度重なる失敗に、現役を退く決意を固め、1911年12月1日に海軍を辞職するに至った。

辞職を契機に横須賀から東京に引っ越し、飛行機の研究団体の創設に取り組み、1912（大正元）年8月「日本飛行協会」（11月「日本航空協会」と改称）を創立した。翌13年4月には、「帝国飛行協会」と合併、新名称は「帝国飛行協会」とされた。

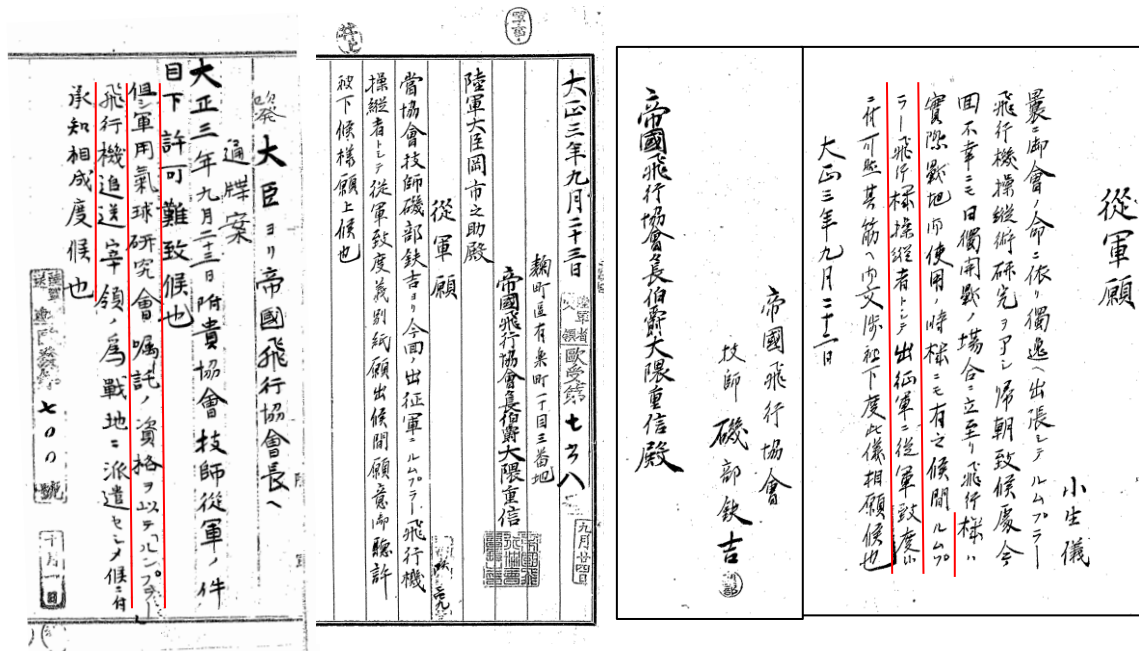
同協会は、飛行機技術の発展と普及のために、外国の飛行機を購入することになり、ドイツのルンプラー式タウベ型単葉機が選定された。その操縦訓練のため、磯部は、1913年8月から数か月間ドイツに滞在し、帰国後は、「帝国飛行協会」技師兼所沢飛行場主任が発令された。

1914年2月上旬、ルンプラー機が横浜に到着ののち、組み立ても完了し、磯部は試験飛行を行った。その後、陸軍記念日（1914年3月）、春季皇霊祭（同月）、「帝国飛行協会」主催・大阪朝日新聞社後援の第1回民間飛行大会（大阪鳴尾飛行場、同年6月）などにおいて、ルンプラー機の展示飛行を行った。

1914年7月、第一次世界大戦が勃発した。陸軍省は、青島攻略作戦のため、「帝国飛行協会」からルンプラー機を買い上げ、磯部を陸軍囑託として雇い、操縦士の訓練指導を担当させた。

以下は、青島作戦への磯部の従軍願に関する史料である。「ルンプラー飛行機操縦者トシテ出征軍ニ従軍致度キニ付可然其筋へ御交渉被下度此儀相願候成」との磯部の一文を添付した大隈重信帝国飛行協会長の岡市之助陸軍大臣宛の従軍願（1914年9月23日）に対して、陸軍の通牒案では、従軍要望は難しいものの、「但シ軍用気球研究会囑託ノ資格ヲ以テ

『ルンブラー』飛行機追送宰領ノ為戦地ニ派遣セシメ候ニ付承知相成度候也」と記されている。



* 「陸軍省大日記 欧受大日記 大正 3 年 10 月上」(陸軍省一欧受大日記-T-3-4-27、アジア歴レファレンス：C03024347900)

フランス陸軍中尉として

青島では、飛行機の運搬に支障があったため、直接作戦に貢献できなかったが、磯部は、帰国後もルンブラー機の改造に取り組んだ。しかし、1915（大正 4）年 6 月、「帝国飛行協会」に突然辞表を提出した。それは、第一次世界大戦の欧州戦場において、フランス陸軍航空隊に従軍するためであった。

在日フランス大使館付海軍武官を通じて従軍志願を打診し、同年 8 月 18 日には、長崎から出帆したのである。日本出国の様子は、日本の新聞で、「命を的に 飛行家磯部少佐 昨日仏国へ出発」（『東京朝日新聞』1915 年 8 月 11 日）、「独軍の胆を奪ふべく 磯部飛行少佐 仏国目指して出発」（『読売新聞』1915 年 8 月 15 日）と連日大きく取り上げられ、その注目の高さを物語っていた。

磯部は、新聞の取材に対して、「（青島作戦に従軍出来なかったことは）遺憾で堪らない、今度仏軍に従軍すれば青島の敵（かたき）を本国で取る決心で大に活躍する考へだ。・・・飛行機の編隊飛行は不可能とされて居たものだ。飛行機の爆弾投下なども種々の評があるが大砲を以て射撃し能はざる敵に対し例へば敵の飛行船の襲来に対しては飛行機其物が大砲の弾丸となって飛行船を撃破するなどは人生の痛快事である」と語っていた（「磯部少佐と仏飛行隊」『東京朝日新聞』1915 年 8 月 6 日）。

磯部は当時の心境を、「欧州戦争はますます酣であり、新紙（ママ。引用者注：新聞紙？）を通じてその戦報を読む毎に、せめて一度はその空中戦の実況をも目睹したいと思へば、矢も楯も堪らず、次で協会との相談も纏まり、愈々余は協会を退いて、単身渡仏の計画を描いた」（『空の戦』34頁。同書については後述）と記している。

磯部は9月にフランスに無事到着し、フランス陸軍省から従軍許可があり、日本の海軍省も問題ないとのことから、晴れて入隊がかないフランス陸軍の陸軍中尉となった。磯部は、「かくしてこの千載の一遇たる世界的大戦に、晴れの舞台の空中戦に、日本人として参加するの榮譽を得たるかを思へば、日本軍人としての余の血は燃え、胸は今より勇みに勇むのである」（『空の戦』39頁）とその時の感激を記している。

まず、ファルマン飛行学校、ニューポール飛行学校などにおいて、編隊飛行、敵機襲撃、各種曲芸などの訓練を受け、1916年10月予備隊に入隊した。同年11月N48隊、翌17年1月には第二追撃隊のN57隊に配属され、ヴェルダン付近での戦線に出撃し、「日々戦線上の飛行は愉快にして、ドイツ機と一大決戦を試みたく楽しみ居り候」との元気な通信を送っている（日本航空協会編『日本航空史 明治・大正篇』294頁）。

3度にわたり敵に遭遇したが、ついに1917年3月6日墜落し、重傷を負ったのである。病状は深刻で、「磯部海軍機関少佐 フランス戦線で戦死」と一時打電されるほどであった。二日後には、フランス政府からレジオン・ド・ヌール・シュバリエ勲章とクロア・ド・ゲール勲章が授与された。

墜落当初約40日間意識不明の状態が続いたが、徐々に回復に向かい、同様にパイロットとしてフランス軍に従軍していた滋野男爵も入院中の磯部を見舞っている。磯部の病状は、日本の新聞でも、「磯部少佐恢復の見込あり 時々譫言を口走る」（『東京朝日新聞』1917年3月20日）などと逐一報じられていた。

回復後、当分軍務には耐えられないとのことで、療養も兼ねてフランスを立ち、1917年7月神戸に入港した。帰国後は、「帝国飛行協会」などにおいて、フランスでの入隊経緯、教育訓練や実戦体験について講演を行い、航空機の開発と関連機関の整備の必要性を訴えた。その後、12月、フランス陸軍に正式に退役願を提出した。

帰国後の1918年、磯部は、フランスでの実戦の体験を記した『空の戦』（富山房）を出版した（なお同書は、国会図書館では所蔵を確認できないが、防衛研究所史料室には所蔵されている）。

同書は先ず「序」において、「航空機が現在及び将来の戦争に緊要欠くべからざる武器たるは、今更贅するまでもない」との言から始まる。次いで、現在及び将来の戦闘は「精神と物質と、人と器と相寄り相俟って、始めてその十分なる効果を収め得る」としたうえで、日本の軍人の精神は「勇猛精悍」であるが、物質面特に武器は「猶ほ遅々として進まぬのは遺憾この上もない。特にわが航空界に於て然りである」と述べる。そして、世界的に航空機の発達には萌芽期である故にこそ、「日本の航空界は今が最も緊要なる時期である」と指摘する。

最後に、「偶ま今次の欧州大戦に際して、余は日本武人として彼のヴェルダンの上空戦に

参加し、最新武器としての航空機的能力以外に、航空機に関する各方面の根本問題を目撃し来り、わが国現下の状況に照して、一片憂国の念禁じ難きものあり、乃ち通俗平易を旨として茲に本編著ある所以のものも、実に空中の知識に関するわが一般の覚醒を促進したいからに他ならぬ」と、同書刊行の動機を述べ、「序」を結んでいる。



同書に掲載されている負傷した礒部の写真

「空界の覇者は陸上の覇者であり海上の覇者である」との一文で始まる本文では、飛行家としての半生、フランスでの従軍に至る経緯、実戦体験、空中戦の記録、及び欧州における軍用飛行機の現状など、幅広く論じている。

特に興味深いのは、第一次世界大戦の空中戦の日本への教訓である。四面を海に囲まれた島国である英国が、ロンドンに対する空中よりの襲撃などドイツの航空機に苦悩した経験から、「わが東洋の島帝国を戒むるに足りる」と忠告している。すなわち、上海やウラジオストクに航空機の根拠地を置かれることはもちろん、「遠い太平洋上の艦隊から放つ水上飛行機」に襲撃されるというのである。特に、「外国の都市と違ってマッチ箱の如き木造家屋より成る東京市は、僅に幾十個の火災用爆弾を以て優に焼払」うことによって、「防備なき空屋同然の首都を襲ふことが出来る」として、「空中防備の緊要なるはこの一事を以てしても明々白白である」と指摘していた（2-6頁）。

礒部は、まさに、大東亜戦争における米軍の焼夷弾による東京大空襲を、25年以上前に予言していたのであった。

滑空機（グライダー）の開発

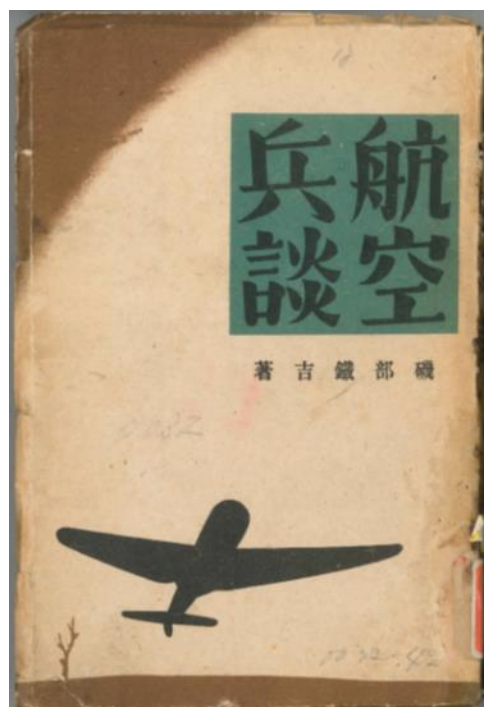
その後も磯部は、飛行機に関する研究を行い、「磯部式有線飛行機」、「磯部式飛行艇浮器」などの特許を取得した。1929（昭和4）年4月からは、海軍機関学校の後輩（15期）である中島知久平中島飛行機製作所（のちの中島飛行機）社長から資金援助を受け、滑空機の設計に着手し、「磯部式1型練習用滑空機」を完成させた。

1930年6月には、わが国で最初の「日本グライダー倶楽部」を設立した（翌31年4月、「日本グライダー協会」と改称）。翌7月、茨城県鹿島の砂丘において、同機によって日本人で初めての飛行に成功した（滑空時間20秒、距離120m。パイロットは、片岡文三郎）。

大東亜戦争末期の1944年4月には、『航空兵談』（霞ヶ関書房）を出版した（同書も、『空の戦』同様国会図書館では所蔵を確認できないが、防衛研究所史料室で所蔵している）。

同書は、自身の体験も交えつつ世界の航空戦史について記述されており、戦時下にあって航空機の補充と乗員の養成が急務であるとして青年学徒の蹶起を促すことを目的としていた。磯部は、「自序」において、「明治維新の国土は、海防を重大視し、林子平は海国兵談を著し、見えざる敵にそなへたが、昭和維新の現在第一問題は『空』である。・・・諸氏は山本元帥に続かねばならぬ。それが第一歩だ。航空機乗員として諸氏は故元帥の魂につづき、天業に忠実なれ」と述べていた。

戦後、1957年2月14日、80歳で逝去したが、主要紙の訃報欄に掲載された。そこでは、「日本飛行協会創立者」として紹介され、「元海軍機関少佐で明治42年ごろ水上機を考案、自ら試験飛行を行ったわが国航空界の草分け」（『朝日新聞』1957年2月15日夕刊）と記されていた。



<参考文献>

- ・ 平木國夫「日仏二つの空を駆けた飛行家・磯部鉄吉」同『黎明期のイカロス群像』グリーンアロー出版社、1996年
- ・ 平木國夫『バロン滋野の生涯―日仏のはざまを駆けた飛行家―』文藝春秋、1990年
- ・ 山田義雄『評伝 パリの空に舞う―大正のコスモポリタン「飛行機男爵」滋野清武の軌跡―』宝塚出版、2011年
- ・ 平木國夫「海外戦死第1号 フランス戦線に死す 小林祝之助とスパッド」同『イカロスたちの夜明け』グリーンアロー出版社、1996年
- ・ 日本航空協会編『日本航空史 明治・大正篇』日本航空協会、1956年

- ・ 荒山彰久『日本の空のパイオニアたちー明治・大正 18 年間の航空開拓史』早稲田大学出版部、2013 年

(研究幹事 庄司潤一郎)